二年前

今でも

死んだはずの猫が私の机に座っている。
緑のまんまるな眼でこっちをじっと見ている。
布団に座っている私を見下ろしている。
お前は私に何を伝えにきた。
私はお前にもう語ることはないのだよ。
なぜなら私は口を失ったから。

長いこと私は悪い行いをしてきた。
人を騙し、脅し、時には殺しさえした。
彼らは、普段決して見せることのない涙を、床に水たまりが出来るまで、私に惜しみなく流した。
また、わざと私に見せつけていた。
テレビで放送しているモノクロ映画の主人公さえ、泣いている始末だった。

そんな時はいつも決まって太古の音楽が私の周りを飛び交っていた。
かつて聴いたことのない、優しい、何色でもない極彩色の音が響き渡っていた。
しかしそれは、私に一時の安らぎを与えはしたが、返ってその安らぎに私は悲しくさせられるのだった。
そのために、私は罪悪を繰り返した。
悲しみに呑まれたくない一心で。
そうして夜ごとに彼らのむせび泣く声は、轟音に変わっていたったのだった。

お前も私が殺したものの内の一人だった。
だが唯一お前だけは一粒の涙も見せはしなかった。
いつでもその机の上から私を見下ろし続けていた。
死ぬも生きるもお前には関係ないようだった。
お前にとって私は日々過ぎていくなんでもない景色と同じだったのだろう。
例え私がお前を殺そうとも。
お前は綺麗なエメラルドグリーンの瞳で何もないところを見つめていた。

お前が死んだ一年後、私は口を失った。
町で出会った裁判官に口を取られたのだ。
判決を言い渡すには裁判官の生まれ持った口では小さ過ぎたらしい。
彼は、悪行ばかりの私に罰をくれてやる、と口を力任せに捩ぎ取っていってしまったのだ。

それからの私はもちろん無口になった。誰とも会話をする機会がなくなった。
そのお陰か、ずるい感情や考えが段々と頭をよぎることはなくなっていった。

今では毎日清々しく生きている。
朝、目を覚ますと窓から覗いている青空はなんだかとてもゆっくりゆっくりしているし、
夜、屋上にあがると見える月は、私に少しばかり神様の存在を気付かせてくれる。
夕陽も最近は泣かなくなってしまった。太陽の貯水池がついに枯れ果てたのだろう。
こうして惨めに湿った布団で眠りにつくことも、現在の私には快く受け入れられる。

だからもうお前に話すことはない。
もう私の前で汚い涙を垂れ流していた彼らは消えた。
安心して眠っておくれ。
枯れた薔薇の隣でよければ。
そうすれば太古の音楽がお前を温かく包み込み、
哀しい子守唄をきかせてくれるだろう。

私は口がないけれど
一緒にお前に歌ってやろう。
いつまでも
お前の緑色の灯りが消えるまで

お前のむく毛が凍ってしまうまで。

二年前

http://p.booklog.jp/book/83398

著者：大きな水
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ookinamizu/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/83398

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/83398

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ